

デパートの元祖

勸工場かんこうじょう

近代的な販売方式とバラエティーに富んだ商品の数々で、市民の人気を集めた勸工場を紹介しなす。

勸工場は、一つの建物を小間割りして賃貸し、借主が和洋小間物、陶器、書籍、たばこ、がん具、楽器などを陳列販売した、いわば現在のデパートのほりりです。また、商品を店の奥にしまい、従業員が座って接客した従来の座売り方式から言えば、販売方式の近代化でもありました。

この勸工場の起こりは、明治十年（一八七七年）に東京で開かれた第一回勸業博覧会に出品した商品の売れ残りを、翌年、麹町こうじにつくった官営の東京勸工場で販売したことにさかのぼるといいます。

商品は選びやすく陳列され、しかも正価販売されており、場内に設けられた休憩所には飲食店まで用意されていたということで、大変好評を博しました。以来、これをまねて民営の勸工場が各地につくられ

るようになりました。

北海道では、十六年（一八八三年）に函館でつくられたのに始まり、十八年（一八八五年）になると、札幌にも現在の狸小路三丁目で、T字形の場内におよそ二十の店舗が並ぶ「第一勸工場」が創設されました。市民に親しまれ、大変繁盛したそうです。

以来、二十五年（一八九二年）に第一勸工場の東隣に「札幌商館」、二十八年（一八九五年）には狸小路二丁目に「北海商館」、三十年（一八九七年）に狸小路の突き当たり一丁目に「共業館」（その後焼失し、三十四年に「共益商館」ができ、さらに四十年の大火後に「札幌商品陳列場」として再建）などがつくられ、明治末には、勸工場ブームが訪れました。

第一勸工場の場内は三条に分かれ、屋上には約四十平方呎の「千秋観」と名付けた茶室まで設けました。室内には、オルゴールや電話を備え、十呎の高さから、札幌市街の全景を見ることができたといいます。また、北海商館では、蓄音機を置いて、レコード一枚分を二銭で聞かせ、吹き矢、玉転がしといったゲームも楽しめたそうです。勸工場は物売るだけでなく、娯楽施設としての顔も持っていました。



札幌商品陳列場 大正8年12月に焼失した

しかし、産業の発達に伴って各都市が膨張し、庶民生活の都会化が進む中で、デパートが現われると、次第に勸工場にとって代わることとなります。

札幌でも、二十六年（一八九三年）につくられ、種苗や農業機械の販売をしていた「札幌興農園」を前身とする「五番館」や、大正五年（一九一六年）に新築三階建ての店舗でにぎにぎしく新装開店した「丸井今井」など、デパートが大衆の人気を集めるようになり、勸工場の時代に別れを告げるようになりました。

（平成十三年十一月号・第八十回）